

献 辞

文学部長 岩 津 洋 二

沖浦和光教授は、本年3月末日をもって定年を迎えられ、桃山学院大学を退職されることになりました。

先生は、1953年東京大学文学部を卒業され、東京都の大森第八中学校の英語教諭を経て、1961年に、創設2年目になる桃山学院大学経済学部にて講師として赴任されました。1964年助教授、1969年教授に昇任。その後、桃山学院評議員や理事など幾多の要職を歴任され、1982年から4年間は、桃山学院大学長の重責を全うされました。さらに、1989年文学部創設とともに初代の文学部長に、1993年の大学院文学研究科創設とともに初代の研究科長に就任されました。実に36年の長きにわたって、桃山学院大学の運営の中心にあってご活躍されました。

先生が桃山学院大学の歴史を作り上げてきた中心人物のひとりであったということについては、だれもが等しく首肯するのではないかと思います。現在の桃山学院大学は、学生数7,500名を超える文系大学として、確実な社会的評価を享受するに至っていますが、38年間の大学の歴史のうちには、大学紛争や経営危機など多くの困難もありました。先生は、持ち前のバイタリティでつねにそのような困難に正面から立ち向かう姿勢を示されました。先生の熱意と奮闘のおかげで、大学の危機的状況が乗り越えられたことも一度や二度ではありませんでした。人生の半分以上ものあいだ、桃山学院大学の発展を支えつづけていただいたご尽力に、ここにあらためて心からの感謝の意を捧げたいと思います。

管理的な業務への献身だけでなく、研究・教育の分野においても、先生の

ご活躍は顕著なものでした。大学教員に要求される仕事のいずれの分野においても希有の力量を発揮した先生は、まさしく桃山学院大学を代表する教員というにふさわしい方であったと思います。

研究においては、「業績一覧」に見られるように、旺盛な好奇心に支えられて、多様な分野に関心をもっておられました。一貫していたのは、つねに民衆の視点にたって、しかも人類の文明の全体を展望する視野を忘れることがなかったという点です。既成の学会的な学問の枠組みを超えて、ついには「沖浦ワールド」とでも呼ぶべき独特の世界を切り開いていられました。とりわけ、80年代から本格的に取り組まれた、日本の歴史における被差別民衆の担ってきた文化的遺産にたいする積極的な再評価は、実践的な課題にも対応した貴重な業績であったのではないかと思います。

また、先生は教えることにも強い情熱を抱き続けておられました。休講を一度もしたことがないというのが先生の口癖の自慢でしたが、実際、先生は学生の指導に労を惜しまない方でした。教室での、「沖浦節」と呼ばれる、手振り身振りを交えた、楽しい話術による講義によって学生に強烈な印象を与えただけでなく、一人ひとりの学生たちの面倒もよくみておられました。

文字通りに、余人に替えがたい先生でした。

桃山学院大学では、わずかながらでも先生のご功績に報いるために、「桃山学院大学名誉教授」の称号を贈り、人間科学会の学会誌『人間科学』の一卷を「沖浦和光教授退任記念号」として刊行し、先生に献呈することにいたしました。

先生におかれましては、ますますご健康に留意され、さらなるご活躍をなさいますようお願い申し上げます。それとともに、後進にたいしてこれまでと変わらぬご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

1997年 3 月